

# 中島敦「山月記」論

——唐代伝奇「人虎伝」と作品の人物・舞台設定を視座として——

橋 本 正 志

はじめに

中島敦（一九〇九—一九四二）の「山月記」は、官吏としても漢詩人としても不遇のまま、ついに〈虎〉に姿を変えた男・李徴の運命を描いた作品である。中国・唐代を舞台にしたこの小説は、中島が南洋庁編修書記として南洋群島パラオに赴任中の一九四二（昭一七）年二月、『文学界』に発表された<sup>1)</sup>。長らく文学的に不遇を味わってきた中島であったが、この小説によってようやく宿望の作家生活への足がかりをつかんだわけである。しかし、翌三月の帰国の後、『光と風と夢』<sup>2)</sup>『南島譚』<sup>3)</sup>を刊行したのを最後に、同年十二月、宿痾の喘息のために死去する。文壇登場から十カ月後、アジア太平洋戦争開戦からまもなく一年になろうとする時期であった。

従来、この「山月記」の主題は、たとえは鷲只雄氏によって、第一に「存在の不条理性」、第二に「芸術にとりつかれた人間の

苦悩」、第三に「性格の問題」と整理され、まとめて「おのれの尊大な自我故に虎と化し、理不尽な生を生きねばならぬ男の悲劇を通して芸術に執する者の苦悩を描いたもの」と指摘されてきた。そして「山月記」研究は、大方このように李徴の告白を基に、その〈生〉のありようを俯瞰する視点から進められてきたといえる。

しかし、「山月記」において李徴が〈虎〉に変身したという事実の裏には、李徴の告白以前に、まず李徴をそのような状態に追いやった社会の実情があったこともあわせて考える必要を感じる。つまり、「山月記」の李徴の悲劇の背後には、舞台である唐代の社会構造が深く関与していると考えることができるとはなにか。

結論からいえば、当時、漢詩の発表の場は、ほぼ官僚の構成するサロンに限られ、その中に身を置き続け名声を揚げるのが、最も「詩家としての名を死後百年に遺」す可能性を有していた。「格調高雅、意趣卓逸」で「作者の才の非凡を思はせる」に十分、

しかも詩への飽くなき執着さえある李徴は、しかし一方で、漢詩が深く政治と関わっていた社会において、詩人の「名」への渴望のあまりの官職の辞職が、皮肉にも自らの宿願を打ち砕くことになつていた（矛盾）に気がつくことはない（傍点・橋本。以下、断りのない限り同じ）。すなわち「山月記」では、ときに自らが生きる社会との距離感すら見失わせ、一つの物事に没入してしまふ人間の峻烈な心のかたがが見定められているのではなからうか。

また、いったん「山月記」を離れ、作者・中島が社会といかに関わっていたかを考える場合、興味深いことに気がつく。自身も李徴と同じように自己の文学が世に認められないという（不遇意識）を募らせていたという事実である。同時代、あるいは他人との関わりにおいて自己を省察するという方法は、中島の文学的特徴であるが、その方法が確立されていく背景には、同時代社会と自己との距離を常に計る中島の基本的姿勢があつたものと考えられる。

さらに、中島文学を論じるにあたって欠かすことのできない視点の一つに、中島の（時局）との関わり方がある。遺稿として、歿後に発表されたエッセイ「章魚木の下で」の中には、次のような一節がある。

戦争は戦争。文学は文学。全然別別のもと思ひ込んでゐたのだ。（中略）書くものの中に時局的色彩を盛らうと考へたこ

ともなく、まして、文学などといふものが国家的目的に役立つせられ得るものとは考へもしなかつた。（傍線・橋本。以下、断りのない限り同じ）

開戦当初は、中島がとくに戦争そのものに反対する態度をとっていなかつたことを考え合わせると、おそらく南洋群島からの帰国後、死去までの一年に満たない期間にあるべき文学の姿とは何かを考え、それは決して（時局）に流されるべきものではないと結論したものと思われる。

では、こうした見解はいつ、何がきっかけで生まれてきたのだろうか。中島がこの境地に至るまでには、多方面にわたる数々の文学的「遍歴」、また、中島が生涯にわたって志向したところの文学性「狼疾」が根底としてあつた。しかし、それだけではない。一九四一（昭一六）年六月末から翌一九四二年三月半ばまで、八カ月にわたつた（南洋行）の影響も大きかつたと考えられる。

中島は「山月記」を脱稿した後、一人南洋群島へと向かう。この（南洋行）の前後において、中島は自己をとりまく社会に対していかに関わるのかという問いをめぐって、文学的な試みを絶えず持続させていたのではなからうか。

そこで本稿では、以上のような目論見のもとで、中島の代表作「山月記」について論じていく。まずは「山月記」と素材である唐代伝奇「人虎伝」との関わりから考えていきたい。

## 一 詩人の「名」への執着

唐代伝奇は、中国・唐の時代に成立した文語体の短い小説であり、登場人物には官吏登用試験・科擧の受験生が多く登場するなどの特徴がある。「山月記」の素材「人虎伝」もその例に漏れず、科擧に合格して官僚となった隴西出身の李徴という男が主人公である。

「人虎伝」「山月記」ともに、唐代において他人と相容れない性格のために官僚社会から脱落し、《虎》に変身する李徴の姿を描くという点ではほぼ同じである。漢学の素養があつた中島は「人虎伝」を読んで、おそらくそこに描かれている唐代の豊かな世界観に強く感銘を受け、その舞台設定を自らの小説の中に活かすべく、素材として借りたものと思われる。ちなみに中島の所見本とされるのは、唐・李景亮撰の「人虎伝」〔唐代叢書〕系統本である。

多くの共通点があるこの「人虎伝」と「山月記」であるが、しかしながら、相違点も少なくない。とくに李徴が官職を失つてからの両者の違いは注目に値する。まず「人虎伝」では、李徴が官を退いた動機は、

徵性疎逸、才を恃んで倨傲なり。跡を卑僚に屈する能はず。嘗に鬱鬱として樂まず。同舎の会既に酣なる毎に顧みて其群

官に謂つて曰く、生は乃ち君等と伍を為さんやと。其僚友咸  
な之に側目す。謝秩に及び則ち退き歸りて間適し、人と通ぜ  
ざること歳余に近し。

とあるように、李徴の「倨傲」な性格のみに起因し、官を辞した後、とくに何を志そうとするのでもなく、単に隱遁生活を送る人物として描かれている。それに対して、「山月記」の李徴には、「下吏となつて長く膝を俗悪な高官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとした」ためとの具体的な辞職の理由が付され、その後も詩人としての「名」にとりわけ執着する李徴の姿が語られている。

また、《虎》への変身の理由については、「人虎伝」の李徴自身は、「皇族の子」という地位と名声を活かして、貧窮とは一切縁のないまま生活するなかで、かつて自分が犯した放火殺人の罪の報い、すなわち因果応報によつて変身したと解釈している。

若し其自ら恨む所を反求せば、則ち吾れ亦之れあり。定めて此に因るを知らざらんや。吾れ故人に遇ふ。則ち自ら匿す所なし。吾れ常て之を記す。南陽の郊外に於て嘗て一孀婦に私す。其家竊に之を知り、常に我を害せんとの心あり。孀婦是れより再び合ふを得ず。吾れ因つて風に乗じて火を縦ち、一家数人尽く之を焚殺して去る。此を恨となすのみと。

さらに、この「人虎伝」での「語り手」が把握する李徴の変身の理由については、すでに乾一夫氏が『唐代叢書』系統本の底本である『太平広記』本の文について、

中国では、こうした動物の精霊に憑かれて精神異常を起こし、そうした動物になる病気を古くから「軛病」と呼んでいる。この作品で、「忽ち疾を被りて発狂す」とか、「忽ち疾に嬰りて発狂す」などと云われているのは、この精神異常の状態を語るものである。／（中略）李徴が才能ありと自任しながらも、敢えて快しとしない卑官にあまんじ、且つは官職をも退かねばならなかった不満の心理が、〈軛病〉への根本的原因をなしているとみるべきであろう。

と指摘しているように、あくまで「疾」といった憑依的症狀に由来するものであり、直接的には素材本文でいうところの「ただ行の神祇に負ける」の原因とする、いわば悪因果の要素が色濃く内容が踏襲されている。

一方「山月記」では、「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」（傍点・原文）とあるように、①人間存在にまつわる不条理性、また、②「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」という一見矛盾しているかのような撞着語法（オクシモロン）によって表現される二つの心理を「飼ひふとらせ」（傍点・原文）たこと、

さらに、③妻子のことよりも「己の乏しい詩業」の方を気にかけたという芸術至上主義に基づくエゴイズム、この三つが変身の直接的理由（もしくはそれにつながる要件）であると李徴によって捉えられ、旧友・袁修にそれらを告白する李徴の姿が新たに創造されている。すなわち、「山月記」においては、李徴は「詩家としての名」を求めようと志すが、文名は容易に揚がらず、生活は困窮し、再度官吏として就職するものの「狂悖の性」という自らの過剰な「性情」を募らせた結果、右に指摘した三点の理由（要件）により、〈虎〉に姿を変えたと解釈する筋立てに書き換えられているのである。

つまり「山月記」は、「人虎伝」を素材としながら、その単なる翻訳としてではなく、人間が〈虎〉へ変身を遂げるといった、にわかには信じることのできない事態に対して、どのように向き合うのか、また、それをいかに解釈するのかといった思考と、その過程で生まれるさまざまな苦悩をいかに他者に伝えるかという点に関心の磁場が設けられており、いわば新たな作品として換骨奪胎されていると考えることができる。

## 二 官僚社会から脱落する「性情」

「山月記」について、もう少し見ていきたい。「山月記」に登場する人物は、李徴と袁修の二人だけであるといっても過言ではない。他に、妻子、駅吏、供廻りが登場するものの、いずれも作品

の展開において深く関与しているとはいえず、もっぱら背景としての役割に終始しているからである。その反面、李徴、袁修という二人の人物造形に際して注ぐ（語り手）の意図は明らかであり、しかもそれは作品の結構の中で終始一貫している。すなわち、「温和な」袁修は唐代の社会における成功者として、一方、「峻峭な」李徴はその社会の脱落者として明確に描き分けられているということである。いかにこれらの人物が鮮明に區別されているか、二人の出会いの場面を挙げてみたい。

翠牟、監察御史、陳郡の袁修といふ者、勅命を奉じて嶺南に使用し、途に商於の地に宿つた。次の朝未だ暗い中に出発しようとした所、駅吏が言ふことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでせうと。袁修は、しかし、供廻りの多勢なのを待み、駅吏の言葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。

ここでの「供廻りの多勢な」袁修と、今や「人喰虎」と呼ばれる「一匹の猛虎」に姿を変えた李徴との、鮮やかな対比は一目瞭然である。同様に、二人の別れの場面をみてみたい。

一行が丘の上についた時、彼等は、言はれた通りに振返つ

て、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思ふと、又、元の叢に躍り入つて、再び其の姿を見なかつた。

「山月記」を締めくくる最も印象的な場面である。ここでも「一行」に対して「一匹」、「丘の上」に対して「先程の林間の草地」、「彼等」に対して「虎」というように、教詞、物理的な位置関係、さらに存在のありかた・姿形についても、李徴と袁修（はじめ一行）とを（語り手）は意識的に分別して描いていることがわかる。中でもとくに注目すべきは、「一行」「一匹」という語句である。これらの語は、素材「人虎伝」にはない。中島の創作部分である。おそらく、舞台の唐代における二人の社会的地位の差を、明確に読者に印象づけるための表現であろう。

これから、「山月記」においては、登場人物がはっきりと二つの型——社会における成功者と脱落者——に分類されて描かれていることがわかる。しかも、そのことを再確認して物語が閉じられる構成になっているのである。奥野政元氏は、この別れの場面に関し、次のように述べている。

李徴の叫びは、あくまでも異類となつた者の叫び、社会の落伍者、失格者の叫びであつて、それは温和な常識人袁修に代表される人々に、見下されるところでこそ成立するのであ

このような人物設定、作品の構成に際しての（語り手）の視線は、「山月記」の主題と深く関わっているのではないか。つまり、一方に社会的な成功者を置き、他方に脱落者を持つてくることで、その社会が潜在的に内包している落差そのものを浮き彫りにし、結果として脱落者の境遇をより悲劇的に読者に印象づけるというねらいである。奥野氏はまた、「この変身のテーマを、今一步押し進めて言うならば、人は如何にして社会に帰属するかはその内実があるう」とも述べているが、以上の点からも示唆に富む指摘であるといえよう。

### 三 詩人願望の（自家撞着）

では、「山月記」の李徴が脱落した社会とは、どのような社会だったのか。それを明らかにするには、私見によれば、「山月記」の舞台・唐の社会が、科挙制度に基づいた文治国家であり、文化人であることはすなわち政治人であったという特徴を抜きにして考えられない。ここで、少し長くなるが、吉川幸次郎氏の文章を引用してみたい。

ことに政治家、官僚は、民族の指導者であるゆえに、文学に参与すること、少くとも詩を作り、規格ある文体で随筆的散

文を書くことが、必須の資格として要請された。（中略）試験問題（科挙の——橋本註）は、政治論、哲学論とともに、詩が出題されるのを、原則とした。かくて政治に参与するものは、必ず文学に参与すべきであり、逆にまた文学に参与するものは、政治に参与すべきであった。少くとも政治への意欲をもつべきであった。李白、杜甫、みな政治へのはげしい意欲をもち、白居易、韓愈、歐陽修、王安石、蘇軾は、詩と散文の大家であるとともに、国家の重臣であり、それぞれの時代の文学と政治を、同時に指導する「巨公」であった。（中略）要するに文学のみの専門家は、存在しないのが、社会の体制であった。<sup>11</sup>

この一方で、「山月記」の李徴は、「性、狷介、自ら恃む所頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしな」という、自身が名声を得ようとした官僚社会と相容れない「性情」をもっている。それゆえに、進士の試験に合格し官僚として立った瞬間は、政治に参与すべき官僚としては脱落した瞬間と同じでもある。これらから、「山月記」における「下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとした」という新たに設定された李徴像、すなわち、詩人としての名声を得るため「人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽」という李徴の姿は、唐代では非常に考えにくい人物造形であることがわかる。唐代の社会では、官吏として挫折すれば、以後いくら詩人を志したとし

でもまず叶うはずがなかったからである。すなわち、李徴が詩人になるためには、官吏を退かないことが必要条件であり、まして後代に詩人としての「名」を残すためには、その官僚社会の構成員であり続けなければならなかったのである。

また、唐代における詩の（伝達）の場を考えてみた場合、李徴は「官を退いた」時点で、すでに詩の発表の時機をほぼ逸していることも付け加えておきたい。鈴木修次氏は、

六朝詩や唐詩の、より多くの部分を占める詩は、社交的な場における詩、対人関係における詩であつて、いわゆるオケイジョナル・ポエムとも称さるべきものが大半である。それらはつねに、ある場において朗誦（朗詠）されて発表されるのがたてまえてあつた。

と述べている。つまり、当時、詩の発表の機会は、ほぼ官僚などの構成するサロンに限られ、その中で詩を「朗誦」し、名声を揚げるのが、最も「詩家としての名を死後百年に遺」す可能性を有していたといえる。

したがって、李徴がいくら「故山、統略に帰臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた」からといって、「文名」が「容易に揚ら」なかつたのは当然の帰結であるという解釈が成り立つ。「「名」は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた」

とまでは省察するものの、「詩家としての名」への渴望のあまりの官の辞職が、皮肉にも詩人としての「名」を獲得するという自らの宿望を打ち砕くことになっていた（自家撞着）に最後まで気づかぬほどに没入している李徴像が浮かび上がってくる。すでに（虎）へと変身した李徴が、のちに今の身の上や煩悶を告白する以前に、李徴の「詩家としての名」を残せるか否かの命運は、唐代の社会構造において、官の辞職の時点でほぼ決定されていたのである。唯一「妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになつた」という二度目の機会も、結局、李徴の「発狂」により潰えてしまう。仮に、李徴が「江南尉」という「賤吏」ではなく、より位の高い官吏に処遇されていたらとしても、必ずしも李徴はその地位に満足したとはいえないだろう。身分制の唐の官僚社会では、いくら科擧に合格した進士であっても、自分より地位が高い「俗悪な大官」は無数に存在していたらうからである。

つまり、この「山月記」に繰り広げられる一連の悲劇は、李徴のもつ「峻峭」な「性情」、また詩人としての「名」への過剰な「執着」心が、自らが属する社会の形態を正確に認識しそこに適応する能力を狂わせ、結果としてそれが自らの願望をも砕いてしまっていたことにまつたかきつけない李徴の心の切迫感によつて示されるのであり、しかも（虎）になつてもまだその状態のまま語り続けている姿により、その深刻さがさらに穿たれようとしているのである。この点に関連して、山本欣司氏は、李徴が袁修と

## 四 「欠ける所」の発見

の邂逅以前にすでに「性情」による詩業の不成就という「悔」の物語を生きていた」と述べ、その現在に至るまでの「後悔を最大限に引き出すために変身という設定がある」と興味深い指摘をなしている。いわば「山月記」においては、唐代の世界観を用いながら、過剰な性格や名譽への執着心により、否応なしに社会から疎外されてしまった人間の生きざまをいかに悲劇的に提示するか、に最たる人物・舞台設定上の工夫がなされているといえよう。

では、官僚として政治にあたる能力のない李徴が、なぜ官吏登用のほほ唯一の手段であった科挙に登第し、「虎榜」に名を連ねることができたのか。これに関して、村上哲見氏は、科挙試験の性質に触れて、次のように述べている。

最終的には実際に官僚となつてどのように行動するかという倫理上の問題に帰着するので、試験としては、官僚たるの基礎条件として、人文的教養の方に重点をおいて、その達成度というところで判定せざるを得ないのである。<sup>14)</sup>

こうした見解に照らして考えれば、進士に登第したものの官吏としては挫折したという「山月記」李徴のかかえる矛盾も理解できると思われる。

もとより「山月記」については、さまざまに論考が積み重ねられてきた。だが、再考の余地の残されている問題点も多い。作中の一文、「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所」をめぐる議論は、その一つである。李徴の詩に「欠ける所」があったと指摘する袁修の（批評）が語られていることは、はたして何を意味するのか。

作品において、李徴の作詩能力の程度を客観的に保証する文が、科挙の試験に合格したという「若くして名を虎榜に連ね」との一文のみであり、しかも、「欠ける所」の存在が袁修によつて指摘されている以上、その解釈にはやはり袁修の判断基準そのものを分析する必要があるだろう。以下に、考察を試みてみたい。まず、「山月記」の本文から、袁修が李徴の詩に対して「欠ける所」を感じとつた場面を挙げてみる。

袁修は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思はせるものばかりである。しかし、袁修は感嘆しながらも漠然と次の様に感じてゐた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑ひない。しかし、この儘では、第一流の作



品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないかと。

李徴の告白が中心となつて展開する「山月記」においても、この部分は、「最も親しい友」であつた袁修が率直に胸中を吐露する数少ない場面の一つである。従来、この箇所に関する論考の多くは、「欠ける所」の内容を、後半に明かされる李徴の「性情」に関する告白の中から導き出し、それを袁修自らが感じたものとして還元してしまうものが多かつたようである。この点に関して、木村一信氏は、

李徴の詩を批評しているのは袁修だという事実を確認しておきたい。袁修の批評は、李徴が白らの「性情」に基づくところの生き方や、「詩業」へのかかわり方の経緯を語ることは無関係に、ただ聞きとつた「詩」そのものへの率直な感想なのだということに注意を払うべきであらう。

との確に指摘している。この提言に付け加えるとすれば、袁修が「第一流の作品となるのには」と条件を示している以上、前述したように、まず袁修の考える「第一流の作品」とは何かを明らかにする必要があるということである。また、李徴の詩は、作中に流れる時間の経過から、「旧詩」と「即席の詩」の二つに分けられ、袁修は始めの「旧詩」に対して「欠ける所」を見出している

ことも重要である。その「旧詩」とは、「曾て作る所の詩數百篇」のうち、「今も尚記誦せる」詩「數十」のことである。後に文中に挿入された七言律詩のことではない。この「旧詩」は本文中に具体的に示されておらず、「長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思はせるものばかりである」と説明されているだけである。

つまり、本文には、李徴の「旧詩」はおろか、「欠ける所」の内容も、また、どんな詩が「第一流の作品」たり得るのかという条件も示されていない。よつて、「作品に書いてないのだから、わからない」という意見が出された。ただし、こうした見方は、「欠ける所がある」と指摘されている以上、袁修にとつてたしかにそう思わせる何かがあつたという事実を軽んじた作品理解にながる恐れがある。ゆえに、袁修をして「欠ける所があるのではないか」と感ぜしめた作者・中島の意図を、ここから読み取ろうとする試みもなされてきた。

だが、視点を変え、李徴と袁修という二人の登場人物の対比的な性格の描き分けをみるかぎり、この議論を深める手がかりを導き出せる余地がまだあるように思えるのである。以上のような留意点をふまえながら、ことに登場人物の描かれ方と作品の構成、この二点を軸として、引き続き当問題を考えていきたい。

## 五 社会との距離感の（喪失）

「山月記」の李徴が「記誦」していた「旧詩」に「欠ける所」とは、どこからもたらされたものであったのか。おそらく、唐代の社会と李徴との間に横たわる微妙な齟齬と関わっていると思われる。

それを考えるにあたって、まず、官僚である袁修の述べる「第一流の作品」とはそもそも何に基づく定義であるのかを明らかにしたい。前述したように、袁修は社会における成功者、李徴はその社会における脱落者として明確に書き分けられていることに着目したい。官僚である袁修のいう「第一流の作品」とは、当然、袁修の属している官僚社会において「第一流の作品」と認められる「作品」を指すと考えるのが自然であろう。袁修の「第一流の作品」であるか否かの判断は、袁修が今まさに所属し、漢詩が政治と深く関わっている社会が下した判断とその性質をまったく異にするものではなかったはずだからである。官僚として「勅命」を奉じるまでに出世した袁修は、当然「第一流の作品」とは何かを会得していたはずであり、だからこそ、李徴の詩に「第一流の作品」となるのは、何処か（非常に微妙な点に於て）「欠ける所」を指摘したのである。そして、その袁修の属する社会とは、科擧制度に基づく官僚社会であった。

これに関し、村上哲見氏は、「中国における伝統的な知識人の

類型を成立させている要件」として次の三つを挙げ、さらにそれを図式化している。

A、人文的教養、具体的にはつぎの二つ。

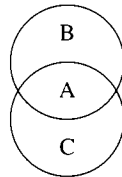
(1) 古典（経書）の素養。

(2) 作詩文（文言の詩と散文）の能力。

（2）は同時にCとしての面をもつ）

B、「治国平天下」の使命感。実践としては官僚として活動すること。

C、尚雅の精神。実践としてはAの（2）作詩文も含まれるが、更にそれを超えて書画音楽などの芸術に秀でること。



A || 読書人の条件

A + B || 士大夫の条件

A + C || 文人の条件

A + B + C || 官僚文人の条件<sup>64</sup>

試みに、これらの「要件」を、袁修、李徴それぞれに当てはめてみたい。すると袁修は、李徴の詩に対する評価能力を含め、官僚として「A」「B」「C」すべてを兼ね備えた「官僚文人」であったと推定でき、一方、非官僚たる李徴は、そのうち「B」の「治国平天下」の使命感<sup>65</sup>を欠いた「文人」（あるいは「C」も欠いた単なる「読書人」）であったことがわかる。これらから、官僚社会が受け入れる人材は、天子を頂点とする秩序の維持とい

う目的上、その機構を円滑にかつ安定して運営させる政治的能力をもった人材だったのであり、その意味において、李徴と袁修との間で明らかに異なっていた要素は、村上氏の言葉を借りていえば、「治国平天下」の使命感<sup>9</sup>のようなものであったと推測することができる。

もつとも、右の見方に拠るまでもなく、「山月記」における登場人物の描き分けに着目しさえすれば、李徴の詩に「欠ける所」とは、漢詩が深く政治と関わっていた唐の社会において、官僚と非官僚という立場の違いに発するところの詩観の違いからもたらされた批評であると考えることまでは可能であろう。「格調高雅、意趣卓逸」で「作者の才の非凡を思はせる」に十分、しかも詩への飽くなき執着さえある李徴であったが、反面、官僚としては不適格者たる李徴の「旧詩」の中に、袁修は自分のもつ詩観とは異なる詩性を見出したのである（ちなみに村上氏は、この「治国平天下」の使命感の方は、試験によってそれ自体の優劣を判定することは難しい<sup>10</sup>）とも述べている。

このように、「山月記」を、唐代という舞台背景をもとに読み解いていくと、例として挙げた、先の村上氏のいう諸条件をすべて満たした「官僚文人」でなければ、「詩家としての名」が死後百年に遺る可能性の少ない時代だったこともわかる。李徴と袁修の社会における立場の差異、また李徴が名声を得ようとした社会を概観した場合、以上のように考えることができよう。

いうまでもなく、素材「人虎伝」では、「山月記」に比して成

功者と脱落者とを語り分ける点に注意が払われているとはいえない。むしろ、主たる関心は「疾」とされた李徴の言動に向けられており、袁修の出世を後日談で紹介する結末部もあくまで補足的な部分にすぎない。また「山月記」の袁修が、李徴の「旧詩」について「格調高雅、意趣卓逸」と評しながらも「何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか」と明らかに分析しているのとは異なり、「人虎伝」では李徴から伝録した漢詩について「閲して歎ずること再三に至る」と無条件に絶賛している点も、「虎」がその獍猛な姿に似つかわしくない美麗な漢詩を朗詠したという意外性に裏打ちされた素朴な驚きにすぎなかったかと思われる。この点からも「山月記」では、詩人としての「名」を残せなかつた李徴の胸中や苦悩に満ちた（生）のあり方に焦点化しようとする（語り手）の基本的姿勢を指摘することができるのである。

これまでみてきたように、「人虎伝」と「山月記」との間には、いくつかの相違点があった。その具体的な違いをみてくる過程で、「山月記」の李徴の悔恨やそれによつた懊悩を引き出すべく効果的に組み上げられた作品の構造もまた明らかになってきたと思われる。

結論を繰り返すと、「詩家としての名を死後百年に遺さう」と願つた李徴にとつて、自らも官僚として官僚が構成するサロンの中に身を置き名声を揚げるのが、最も「詩家としての名を死後百年に遺」す可能性を有していた。「格調高雅、意趣卓逸」で

「作者の才の非凡を思はせる」に十分、しかも詩への飽くなき執着さえある李徴であったが、詩文が深く政治と関わっていた唐代の社会において、「詩家としての名」を渴望するあまり早急に官職を辞したことが、皮肉にも白らの悲願を打ち砕くことになっていた（〈自家撞着〉に終始気がつくことはない。そして、李徴の詩人願望の萌芽は、まさに「大官」のいる官僚社会を「俗悪」なものとして捉え、そこを辞職した瞬間において発見される。しかし、これは詩人として「名」を揚げる機会をほぼ永久に失った〈挫折〉の瞬間に他ならなかったのである。

すなわち、〈虎〉に変身した李徴が「胸を灼く悲しみ」を語る悲劇としての「山月記」の主題を探る際には、その告白以前に、まず李徴をそのような状況に追いやった同時代社会のあり方がいかなる性質のものであったのかという点をあらためて検討する必要がある。作品末尾の李徴の悲痛な咆哮の深奥には、同時代である唐代の社会の中で、人間はいかに生きるかという根源的な問いが刻み込まれていたと指摘できよう。

## 六 同時代批判の芽生え

以上のように、中島は「山月記」において、唐代に〈異類〉に変身する李徴という男の姿を描いた。この李徴の悲劇の根底には、彼の「性情」と社会との摩擦から生じた〈不遇意識〉が多分に影を落としていた。したがって「山月記」は、これまでの理解

に加えて、李徴の「性情」と社会との激しい相剋の過程とその行方を追った物語、換言すれば、同時代社会との関わりの中で自己がいかに生きるべきかを模索し、ついに「発狂」して〈虎〉へ姿を変えるに至った男の話であるとも解釈できる。

李徴の不運な境遇の裏に、李徴にとって苛烈な社会があったことは重要である。「山月記」におけるこの一連の構図は、「山月記」脱稿後の中島の南洋群島での言動と酷似していることを、最後に確認しておきたい。一九四一年八月二十二日付、父・田人宛の書簡には、次のように記されている。

「下級官吏が如何に考へた所でもならぬ話で、之で死ぬるものならば、これは、もう天なり命なりとあきらめるより他ございませぬ、」

また、翌九月十三日付、同じく田人宛の書簡、

「実に イヤで イヤで 堪らぬ 官吏生活（蠟を蝕むところではございませぬ。こんなあぢきない生活は始めてです）（中略）しかし近頃はもう、将来の予想など、しないことにしました。このやうな時世では、チツボケな個人の理想など、もつと大きな世界の変動のために何時みじめにひつくり返されるか判らないからです、」

からは、自らも南洋庁の役人として「大きな世界の変動」を前にしての「個人の理想」の無力を確認する態度がみてとれる。これに類する態度は、「山月記」の李徴には、「最早、別れを告げねばならぬ。酔はねばならぬ時が、（虎に還らねばならぬ時が）近づいたから」というように、すでに（虎）になつた後であらわれていた。

（異類）の身となり人間世界から消えてしまふ「山月記」の李徴と比べて、しかし、中島のこの態度は、今までの自己のありようをあらためて同時代に流されない（新たな生）に向けて魅らせるきつかけでもあつたことは間違いない。それは、中島にとつての（南洋行）が、出発前から、

今迄、肉体的にも精神的にも甘やかされ過ぎてゐたから、この無理が却つて、薬になるのではないかと思つてゐます。少くともさう希望してゐます、（一九四一年六月二十八日付、田人宛置手紙）

という（不遇意識）に苛まれた自己から精神的な脱皮を試みようとする一縷の希望を秘めた旅でもあつたからである。つまり、喘息のために悪化の一途をたどつていく肉体と、そこに宿る数々の（不遇意識）に触まれた精神とを克服し、（自己の再生）に願いをかける一つの場が（南洋行）であつたといつてよいだろう。結果として、「章魚木の下で」において、

自己の作物に時局性の薄いことを憂へて取つて付けた様な国策的色彩を施すのも少々可笑しい。（中略）書けなければ書けないで、何も無理をして書かなくともいいのではないか。

という立場に至る先の書簡の中島の態度は、屈折しているとはいへ、言葉の裏に前向きな性格を内包していたものとして解釈すべきである。次の一九四一年九月二十日付、たか夫人宛の書簡は、実に中島らしくその実質を示している。

今年の七月以来、おれはオレでなくなつた。（中略）昔の誇も自尊心も、昔の遊びもおしゃべりも滑稽さも、笑ひも、今迄勉強してきた色々な修業も、みんな失くして了つたんだ。（中略）お前たちのよく知つてゐる中島敦ぢやない。ヘンなおカシナ、何時も沈んだ、イヤな野郎になり果てた。（傍点ルビ・原文）

「今迄勉強してきた色々な修業」とは、いうまでもなく自らの文学を指すだろう。中島は、それらを含め「みんな失くして了つた」と述べる。また、横浜出発前の（不遇意識）に囚われていた自身との比較を試みた末に、持ち前の自嘲で、今の姿は「何時も沈んだ、イヤな野郎」であると表現してみせる。

つまり、（南洋行）以前に中島を捉えていた種々の（不遇意識）は、ここにおいて新たな方向——（自己の再生）へと質的变化を

遂げつつあったといえるのではないか。そして、「おれはオレ、  
なくなつた」と明言した中島は、この後南洋群島において、「島  
民」児童を対象とする国語教科書編纂者としての仕事を通じて  
「時局」を読む努力をし続けるのである。それは、同年十一月六  
日付、出人宛の文書、

現下の時局では、土民教育など 殆ど問題にされてをらず、  
土民は労働者として、使ひつぶして差支へなしといふのが  
為政者の方針らしく見えます、之で、今迄多少は持つてあ  
た、此の仕事への熱意も、すつかり 失せ果てました。

また、同年十一月九日付、たか夫人宛書簡の、

その土人達を幸福にしてやるといふことは、今の時勢では、  
出来ないことなのだ。

という明らかに「時局」「時勢」という同時代を意識した表現に  
よつて証明される。中島の〈不遇意識〉、中でもとくに文学的な  
〈不遇意識〉が、その構造上あらかじめ同時代を「世俗」とみな  
す性質をもつていたことにはすでに指摘した通りであるが、中島  
は、さらに南洋群島という新しい世界での体験を通じて、のちの  
遺稿「章魚木の下で」にみられるような明確な〈批判〉のかたち  
をともなつた同時代批評に結びつく視点を獲得したのだといえ

る。

このような意味で、〈南洋行〉の直前に脱稿され、文学的な  
〈不遇意識〉に苛まれた李徴が〈異類〉へと変身する過程を語つ  
た「山月記」は、中島の共感が深く込められた作品として、帰国  
後の「章魚木の下で」へと至る諸作品を結び貫くラインの起点に  
位置づけられる物語であると結論できよう。

おわりに

中島敦は「山月記」において、唐の時代に〈虎〉に変身した李  
徴という男の運命を描いた。李徴の不遇な半生の裏に、彼にとつ  
て苛酷な社会があつたことは重要である。ここから、「山月記」  
とは、李徴の社会との関わり、方に焦点化した物語であり、同時代  
社会の中で自己がいかによく生きるべきかを探求した結果、いつ  
の間にかその社会から遠く隔てられていた男の〈生〉を、悲痛に  
満ちた生きざまとして綴つた物語であると解釈できる。

「山月記」には、一つの目標を掲げ、その達成のためにひたす  
ら専念するばかりに、本来その実現のために欠くべからざる必要  
条件を見落とし、ひいては社会と自己との距離感すら見失つてし  
まった人間の烈しい焦慮に駆られた心のかたちが見定められてい  
るのである。それが〈虎〉という言葉によって、象徴的に示され  
ているといえよう。

中島は、以上のような物語の枠組みにおいて、李徴の〈虎〉へ

の変身の理由(要件)を、素材「人虎伝」の過去に犯した罪の報いという因果応報によるとする理解から、人間存在の不条理性、自意識に苛まれた知識人の苦悩、芸術至上主義に基づくエゴイズムといった、人間の内面に起因する新たな心の動態によるものへと捉え直して作品化したのである。そして、社会から脱落していく人間の焦燥に満ちた(生)のありようを深めることが、その後の人々の文学のかたちを見定める営みとも強く結びついていたことを指摘しておきたい。

### 註

- (1) 「古譚」の総題のもと、「文字禍」とともに発表された。
- (2) 『光と風と夢』(筑摩書房、一九四二・七)
- (3) 『南島譚』(新鋭文学選集二) (今日の問題社、一九四二・一一)
- (4) 鷺只雄「古譚」―物語の饗宴―(中島敦論―「狼疾」の方法) (Littera Works 2) 所収、有精堂出版、一九九〇・五)
- (5) この告白の正確さそのものへの検討が必要であるとする蓼沼正美『山月記』論―自己劇化としての語り―(国語国文研究) 八七、一九九〇・一一) もある。
- (6) 『新創作』新年号(豊国社、一九四三・一) に発表された。
- (7) 「人虎伝」(国民文庫刊行会編『国訳漢文大成』(文学部

第十二卷晋唐小説) 所収、国民文庫刊行会、一九二〇・一二)

- (8) 乾一夫「人虎伝(余説)」(内田泉之助・乾一夫「唐代伝奇」(新釈漢文大系四四) 所収、明治書院、一九七一・九)
- (9) 奥野政元『山月記』ノート(『活水日文』二二、一九九一・三)
- (10) 註(9)に同じ。
- (11) 吉川幸次郎「序論 一つの中国文学史」(吉川幸次郎編『中国文学論集』所収、新潮社、一九六六・一二)
- (12) 鈴木修次「唐詩の場」(『唐詩―その伝達の場』(NHKブックス二六七) 所収、日本放送出版協会、一九七六・一〇)
- (13) 山本欣司「後悔の深淵―『山月記』試論」(『日本文学』四七・一二、一九九八・一二)
- (14) 村上哲見「文人・士大夫・読書人」(『中国文人論』(汲古選書二二) 所収、汲古書院、一九九四・三)
- (15) 木村一信「何処か(非常に微妙な点に於て)欠ける所」(『管見』(中島敦論) 所収、双文社出版、一九八六・二)
- (16) 関良一「ギリシヤ的叙情詩」と『山月記』について(『国文学 言語と文芸』四二、一九六五・九)
- (17) 鷺只雄『山月記』私見―「欠ける所」他をめぐって(

(前出「中島敦論―「狼疾」の方法」所収)など、諸氏により示されている。

(18) 註(14)に同じ。

(19) 註(14)に同じ。

(20) 拙稿「中島敦の漢詩―(家学)の衰頹と(不遇意識)のかたち」(『論究日本文学』九一、二〇〇九・一二)

#### 付記

本文、書簡等の引用は、すべて筑摩書房版第三次『中島敦全集』全三卷(筑摩書房、二〇〇一・一〇、二〇〇二・一二)に拠った。その際、原則として旧字は新字に改め、ルビ等は適宜省略した。

なお、本稿は中国での講演「唐代伝奇『人虎伝』と中島敦『山月記』」(二〇〇二年十一月二十二日、主催・浙江師範大学外国語学院、於・浙江師範大学)を基に、大幅に加筆したものである。当日、通訳を下さった陳楽先生(浙江師範大学外国語学院)をはじめ、会場でご教示頂いた方々に深謝申し上げる。

#### 謝辞

筆者の二〇〇一年から二〇〇六年にかけての二度の中国赴任(日本語教育)のきっかけを作って下さった彦坂佳宣先生に、この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

(はしもと・まさし 本学非常勤講師)